

立山山麓温泉開発株式会社の歩み

第1章 創業前史

はじめに

この大山地区は、古くから立山、薬師岳等の自然の厳しい環境と豊かな恵みを多く持ち、富山市の面積の46.1%を占めています。立山山麓は電源開発に始まり、観光分野としても有峰や立山アルペンルートへの玄関口の役割を果たしています。

この地区には、原からは、原砦跡、原遺跡、吉兵衛山遺跡、本宮・花切遺跡からは集落跡があり、縄文中世の遺跡が発掘されています。また、多くの仏教修行者の入峰を平安時代から立山への修行道として利用され、小見から本宮を通り、原、アワツ、足洗川、立山温泉、松尾峠、雄山への道が古地図に記載されています。各所に、尊谷、花切割、牛石、一里塚、百間滑、龍神の滝、足洗川、不動沼、ハライ谷、キリフキ滝等の仏閣の地名が現在も残っています。

この地では、北陸随一のスキー場として、昭和35年に栗巣野観光開発(株)により栗巣野スキー場が完成し、昭和40年に大山観光開発(株)により（第三セクター方式）極楽坂スキー場、昭和52年に県営ゴンドラスキー場がオープンしました。その後、立山山麓レクリエーション開発(株)が設立（第三セクター）され、立山山麓家族旅行村がオープンしました。

また、全国育樹祭を開催し皇太子殿下、同妃殿下、国体、中部日本スキー大会には、故高松宮殿下、常陸宮殿下同妃殿下、秋篠宮殿下同妃殿下が来場されている場所です。

各スキー場では、全国中学スキー大会、全国高校スキー大会、国民体育大会冬季スキー大会をこれまでに各2回開催するなど、多くの県内大会や全国大会等が開催され、富山県のスキーのメッカとされています。

・平成7年～ 温泉観光地への組織作り

少子化問題に伴いスキーヤーの減少と生活の多様性を求める人達が増え、各旅館もそれらの対応が求められる時代となり、通過型から滞在型への転換期の時代になっているのを旅館組合の皆さんも予見していました。

また、立山山麓の各スキー場に旅館組合があり個別に活動し、旅館・飲食店等も共に冬季営業を中心とした営業を続けています。

夏期には、一部のホテル、旅館、民宿等が立山アルペンルートへ訪れるお客を誘客していましたが、滞在型観光地としての魅力を増す目的で、ホテル、旅館、飲食店等の各組合から組合をまとめる組織を作りたいとの話が持ち上がり、その中に立山山麓での温泉開発の話が浮上したのです。

この時代は各スキー場も、設立以来一番多くのスキー客が来場していた時期でした。しかし、雪不足の年も数年に一度はあり、常に不安定な営業を続けていたのも事実でした。

平成6年頃には立山山麓旅館飲食店等連絡協議会はありましたが、その活動をより活発化させるため、再度話し合いを進め、関係者の努力により平成7年7月4日に、「立山山麓旅館飲食店等連絡協議会」が設立されたのです。

会長に高尾昌明氏、副会長に平本芳光氏と坪川俊雄氏が就任、温泉開発特別委員会の委員長には岡本保氏が就任しました。

その組織の中に温泉開発特別委員会を設置し、地元スキー場関係者、行政、ホテル、地元企業関係者等も含めた組織を立ち上げました。総会後には、「旅館の本音、お客の気持ち」と題して町田総合企画代表の講演も開催しましたが、当地での温泉開発には自然の湧水と違い、多額の資金が必要で皆さんの不安を解消する為の説明会を温泉掘削業者と幾度となく会合を開き、近県の温泉地へ赴き視察を重ねました。行政等への話し合いは、高尾会長や山森町議、平本町議、岡本町議らが働き掛けをし「町も議会で積極的に地元の意見を反映させたい」と動き出すことになったのです。

第2章 候補地の模索

・平成8年～ 温泉調査に関する話し合い

平成8年8月から、温泉調査の為の掘削についての説明会を開き、温泉工事の細部に渡り説明を受けたのですが、最大の問題点が膨大な資金面にあり、業者の選択が論点となりました。

栗巣野地区で、温泉の掘削経験のある立山山麓レクリエーション開発(株)へも働き掛けましたが、交渉は決裂に終わりました。また、温泉法に抵触する半径500m以内での認可が下りないので、立山山麓全体の中で調査する事になった次第です。

電探調査では、3ヶ所が候補地になりましたが、用地（農地転用）の確保と湯管の埋設等（資金面）の問題もあり、年間を通じて温泉を輸送する事が当面の課題として持ち上がり、候補地として高尾氏の所有地内を一部借用する形となりました。

9月には、連日の役員会や懇談会等を開き、臨時総会では温泉が出た時の分担金について話し合い、あわすの平温泉掘削費分担表を皆さんに提示しました。（参加者44名）

10月14日には臨時総会を開催し立山山麓温泉工事見積書を各社に提示してもらい説明を受けました。飲食店等からは旅館と分離する意見が出たので、通年営業と季節営業に分けて試算することになりました。その後も温泉開発特別委員会で、温泉開発のノウハウを業者から聞いたり大山町への要望事項をまとめる事になりました。

12月には、温泉開発に係る組織づくりと今後の業務の進め方を話し合い「立山山麓旅館飲食店等連絡協議会」と「温泉開発特別委員会」の合同会議を開催し、立山山麓の温泉探査・掘削工事にかかる見積書額比較を提示したのです。

当然、温泉開発事業（当面、掘削工事まで）を推進することに同意することや事業に伴う出資

金についての確認書を提示しました。各旅館組合でも臨時総会を開催され、温泉開発への現状と話の進み具合等も報告されていきました。

第3章 試行錯誤から歓喜へ

・平成9年～ 温泉の掘削と湧出

平成9年3月に、立山山麓温泉開発(株)、仮称「設立準備委員会」の設置と役員人事を決め、その中で立山山麓温泉掘削設計コンペを作成し、掘削業者へ提案をお願いしました。

1. 掘削について

- ・請負方式により当地に1,200mの温泉井戸を掘削した場合、概算でいくら掛かるか。また、1,000mで湧出した場合、減額に応じられるのか。その場合、減額率はどの位か。40℃の温度で毎分100リットルを湧出させるにはどれだけ掘削しなければならないのか。経費はどの位掛かるのか。また、ケーシングプログラムの最終口径は、何ミリか工期を含めて回答を求める。

2. 給湯について

- ・当地区旅館等40施設へ安定的に温泉を供給する場合として、1本の井戸で十分だと判断されるか、その場合どのような方式で給湯されるのか、施設計画書や金額の提示を求める。
- ・2本掘削した方が有効と判断されるのであれば、その費用はいくらか、管理費を含めての回答をお願いする。

3. 温泉利用について

「温泉掘削費は御社で負担し、当地区内に給湯会社を設け、各社に温泉を販売する方式に参加する意志があるか、その場合にはその金額等を具体的に提示されたい」等を掘削業者に意見を求める。

それと並行し、温泉掘削工事着工までのスケジュールを提示し、会社か共同組合か等の選択を視野に入れて、公認会計士の講演勉強会を開催。

業者からは、見積書の提出があった4社の内、2社に絞りヒット&ペイ方式が案として出る。(成功すれば支払いし、失敗の時は負担ゼロ) 最終案として、日本テクニカルセンターに決定する。

5月には、会社設立に伴う諸準備の話し合いと業者選定経過の報告を行いました。6月には、株式引受を立山国際ホテルへお願いしました。

事務局員に、米井修氏(上市町)に就任いただき、また株式の仮申込では、24名の申込がありました。当面の会社事務所の設置場所がなかったので、花切の近くにある森林協業センター内の一室を事務所として設置し業務を開始することになりました。

6月中旬に立山山麓温泉開発株式会社設立発起人会を開催し、発起人組合の規約を定めました。目的は、①温泉源の調査、試掘及び掘削、②温泉の供給、販売、③前号に付帯する一切の事業

を目的として発行株券、発行価格、発起人氏名5名を決めました。

発起人の持ち株数は、高尾建設(株)が100株、立山国際ホテル(株)が100株と平本芳光氏、平井建夫氏、舟橋 清氏がそれぞれ10株となりました。

そして7月1日に立山山麓温泉開発株式会社創立総会を開催するまでに至ったのです。

設立時は、230株、募集株式数は210株となり総数で440株でした。また、株主の参加者は26名となったのです。

その後の役員会で日本テクニカルセンター（ヤマシタ(株)）に選定し、漸く動き出したのです。掘削の機械は、石油の掘削に使用するものであり工事期間も短く、深度1,500mまでは短期間で行なえるという説明でした。

平成9年12月8日に立山山麓温泉開発(株)第1期定時株主総会を開催するまでに至り、次年度の3月から温泉掘削の準備を開始して、4月より掘削を開始、7月には湯量・温泉成分等を確定し、9月に開催される温泉審議会へ温泉認可申請書を提出する事になりました。また、増資計画では工事の進捗状況を踏まえながら、関係方面への陳情や増資の協力を要請すると決定したのです。

平成10年3月10日に、富山県から温泉掘削の認可（平成10年2月27日付）があり、4月2日に待望の立山山麓温泉工事安全祈願祭を大山町原9-6（当時ホテル第一荘前の駐車場）にて挙行し、高尾社長以下役員関係者、大山町長や大山町議会、株主や工事関係者、地元有志等が参列し、温泉湧出への夢を掛けて工事の安全を願いました。

毎日、現場に足を運び工事の進捗具合を確かめたところ、丁度深度300m位の時点で水が多いとか、深度500mから800mでは硬い岩盤に差し掛かっている旨の報告がありましたが、1,000mから1,215m頃には温度の高い水が湧出し、硫黄分が微かに漂い井戸の周囲に立ち込め手に触れると、手触りがツルツルとしたものに感じられました。早速、試飲もしてみましたが無色のものでした。

特に「手に触れるとツルツル感が肌に感じられ気持ちの良いもの」であり、専門家によると「硫黄分が少なく、配管への目詰まりは無いのではないか。」との見解で、硫黄分が多いと配管に付着し数年ごとに付着する硫黄分を取り除かないと湯量が不足するとの説明でした。

6月10日頃には、工事の井戸から毎分110リットル、湯温43.4℃の湧出を確認できたので、直ちに県衛生研究所の検査を受け温泉の確認をいただくことになりました。

泉質は、炭酸水素イオン度の多いナトリウム炭酸水素塩泉で、ツルツルした感じで肌さわりが良く「美人の湯」と呼ばれている所以です。又、適応症として神経痛や筋肉痛、慢性の消化器病や皮膚病等に効果があるとの専門家の意見を聞いたのです。その日の内に、温泉関係者が待ちに待った待望の温泉が湧出したことを皆さんに知らせるとともに報道各社にファクスを送ったのです。

6月11日に、立山山麓に待望の温泉が湧出したと報道各社や地元テレビ局のニュースによって広く世に知られることとなったのです。

第4章 資金面への提案

・平成10年～平成11年 富山国体、グリーンビュー立山の加入と高尾初代社長の急逝

湧出はしたものの、それからが大変でした。深度1,200mあるのに井戸のポンプ設置位置は深度800mから温水を汲み上げる事になり、その為のポンプの種類も3種類あり、キャビティー型に決めて工事を進めたのですが、ポンプはアメリカからの輸入製品で船便で1ヶ月はかかるというので発注しました。その間は資本金増資について役員会の開催などを開きながら、地元各金融機関へ融資をお願いをして回りました。

7月11日に温泉湧出祝賀会を現地にて執り行い、高尾社長以下、温泉会社役員や大山町長、大山町議会議員、工事関係者や地元総代、自治振興会や旅館組合員等の参列で温泉湧出を祝いました。

高尾社長は挨拶の中で、「20年来の夢だった立山山麓スキー場のホテル、旅館に温泉が配られる。来年中には工事を終え、2000年国体までには出資しているホテルや旅館はもちろん、希望する施設に温泉を供給したい」と挨拶されました。

その後、立山国際ホテルにて株主懇談会を開催し、経過報告と今後の予定を意見交換したのです。

温泉の湯出量が年間を通じて平均になるまでは1年間の期間を見ているので、確定するまでの資金の確保が前提であり、設備費の算出をしながら、自己資金、温泉権売却収入、借入金等を算出基礎として試算を開始しました。しかし、配湯料金が低いと取引先との資金計画に狂いが生じるので大口と小口共に同一の料金として進めたのです。

温泉権として、町への売却も視野に入れ、土地の所有者である高尾さんから分筆し温泉会社の所有地として3.30㎡を取得しました。

平成10年7月には、資本金22,000千円のところに58,000千円増資の80,000千円とし、発行株式総数は440株のところ1,160株の新株を発行し1,600株にしました。後日になって資本金増額を決め、新たに資本金160株を発行し、資本金70,500千円とし、株式発行済株式総数1,410株、株主数28名となったのです。

平成11年1月に、大山町と温泉権について契約を終締結 J A 県信連等の契約をしました。

平成11年4月には、立山駅周囲の宿泊施設であるグリーンビュー立山から温泉利用の意向が伝わり安堵した次第です。

また、温泉に付随する施設として温泉を格納する50 t タンクの設置、ポンプ室、事務所の新設、配湯車両の購入等が不可欠であり、事務所、貯湯タンク施設、モニュメント等の周囲は高尾さんから借地することにしました。

各配湯する施設の方々には、自己資金で貯湯タンク設置をお願いし、冬期間は配湯車の出入りのための除雪をお願いする等の話し合いを進めるとともに、保健所への届ける資料は、温泉会社で一括して事務局にて提出しました。

当時は県内でも温泉の湯を配達するところは一箇所あったのですが、必然的に湯の運搬であり、温泉の温度が下がる事を使用者が了解していることが条件でした。

平成11年9月13日に鉱泉地を取得するとともに、9月16日には立山山麓温泉配湯施設他建設工事安全祈願祭を現地にて行い、高尾社長の指揮のもと雄山神社宮司さんの祭主で始まり、温泉会社全役員、大山町長、議会関係者、金融関係者、工事関係者、地元商工会、旅館関係者等の方々に参加をいただき安全祈願祭を行い、12月20日を目標に工事に取り掛かりました。

平成11年10月6日の昼、「高尾昌明氏がお亡くなりになった」との訃報が届き、今後について一抹の不安を禁じ得ませんでした。平成8年から共に行動し、立山山麓旅館飲食店等連絡協議会を設立、その中に温泉開発特別委員会を設置し、温泉開発への大きな希望と期待を関係者で分かち合い、立山山麓温泉開発株式会社の設立、待望の温泉も湧出し、最後の工事に取り掛かった矢先の出来事でした。

同年10月14日に役員会を開き、今後の資金計画、給湯規約、借入返済、総会等があり代表取締役の選任を商法に基づき選考し、代表取締役として平本芳光氏、平井建夫氏を選任し登記しました。

12月12日に立山山麓温泉開発(株)の総会を立山国際ホテルにて開催し、代表取締役に平本芳光氏を選任するとともに役員の任期に伴う改選等も行いました。役員一同は、故高尾昌明社長の遺志を継ぎ邁進することを誓ったのです。

12月20日には、温泉配湯施設他建設工事も無事終了し、記念セレモニーを立山山麓温泉配湯施設等の前で、当温泉開発会社社長の平本芳光、大山町長の飯幸夫氏、大山町議会議長の畔田武雄氏、富山県観光通商課課長代理の野上孝明氏、大山町助役の速水通男氏の各氏でテープカットを行い、モニュメントの除幕式には、当温泉開発会社役員、大山町議会議員、地元関係者等が参列しました。

その後、竣工式を立山国際ホテルで開催、工事施工関係者に対し平本社長から「温泉施設建設工事にあたり豊富な経験と優秀な技術を結集されこれを立派に完成されました」と2社に対し感謝状を贈呈しました。

祝宴では、大山町・大山町議会、金融機関からは立山山麓への年間を通した観光資源の活用に大きな期待の声が寄せられ、今までの苦労が報われたと思った次第です。

第5章 工事や施設の不安

・平成12年～平成17年 度重なる設備の故障

平成12年2月から立山山麓で開催される「2000年富山国体」に向けて各施設から出ていた温泉浴用利用認可があり、全国から来場する選手・役員・関係者の方々にアピール出来る良い機会となりました。その後も富山県市町村職員共済組合（グリーンビュー立山）とも温泉権譲渡の契約を結び将来への安定した給湯施設の確保としたのです。

しかし、温泉を配送する人材が米井さん1人だけでは不足していたので、ボランティアをロッ

ヂ太郎の佐々木氏、平井山荘の平井氏、ホワイトベルの石田氏に応援をお願いし、各施設に配湯していましたが、その後、非常勤として岩崎寺在住の岡本外喜男さんが勤務されました。

丁度その頃、機械の不具合で各施設への温泉の供給が出来なくなったのです。各施設へポンプ故障による温泉供給が出来ない旨を知らせると共にヤマシタ(株)に工事の対応を依頼しました。

当社井戸のPCポンプを引き上げ開始すると途中のネジが外れていたり、カップリングに割れが生じていたり、ステーター部分の点検ではステーター内部のゴムの部分が荒れている状態でローターが焼き付いたりなど、ヤマシタ(株)のテストポンプを2回挿入しテストしても修復できないので、ヤマシタ(株)が他社へ納入する予定だったポンプを譲り受け、当温泉の井戸に設置してようやく毎分23リットルの揚湯量を確保したこともありました。

平成12年8月1日には、富山県から温泉利用の認可を受け立山山麓の温泉としてお墨付があり、会社前にて立山山麓温泉スタンドを設置し販売を開始すると、個人でポリタンクにお湯を入れて運ぶ人達の姿を見受けられるようになりました。

同年11月に再びポンプの故障が発生し、ステーター部分の内部が摩耗して焼き付く事態となり、12月4日には3回目のポンプ取替工事をして揚湯試験で何とか毎分25リットルの湯量を確保し各施設に配湯することができました。

平成13年9月には4回目のポンプ入替工事をし、毎分45リットルの揚湯を確認してから各施設に温泉を配湯しました。

この頃は、温泉への期待感やアルペンルートでの宿泊客の増加もあり順調に売上げも推移していたのですが、各施設への入り込み減少が見受けられました。

そして、同年12月の定期株主総会で高尾道明氏が三代目社長を就任し、現在に至っております。

平成17年3月にもポンプの故障があり、やはり4日間揚湯を停止し補修しています。

第6章 通過型観光地から滞在型の観光地へ

・平成18年～平成28年 市町村合併・スキー客の減少・これからの課題

平成17年に大山町が富山市と合併、立山山麓旅館飲食店等連絡協議会の解散や各旅館組合の解散と続き、改めて立山山麓観光旅館組合を設立しています。

また平成18年10月には、県営らいちょうバレースキー場が富山市に移管され、大山観光開発(株)が運営することに、立山山麓レクレーション開発(株)は解散することになり、厚生年金センターの経営者も替わりしました。近年は全国的にスキー客の減少が見られるなど、立山山麓周辺の各民宿の閉鎖も相次ぎ厳しい現状となっています。

最近は、健康志向が広がり、高齢者が自分なりの余暇を楽しむ傾向となり、全国的にも森林セラピーへの関心が高まっています。

当時は大山町観光協会の中里事務局長、平本会長が森林セラピーへの関心を組合員に呼び起こ

し、地元の立山山麓温泉の各施設と遊歩道にある百間滑、龍神の滝、龍神のご神木、白樺平の自然、鍬崎山、有峰等を組み合わせた北陸で初の森林セラピー基地として立山山麓を認定に結び付け、豊かな自然を背景に人々が来訪されることを願ったものでした。

立山アルペンルートの登山口として、富山市民が短時間で立山の溪谷美に触れられる場所として、行政と民間が一体となり百間滑、龍神の滝、瀬戸蔵山の遊歩道整備で発見した松尾の滝、松尾山の大杉、龍神のご神木等の新名所も出来て、現在では年間7,000人の人達が来訪されています。

富山市内から車で40分、あわすのスキー場から15分で行ける百間滑は、富山市民の自然に癒される憩いの場所として整備されるに伴い、シーズンを通じて皆さんの関心が高まっています。旅館組合としても、滞在型の方には是非お勧めしたいコースとなっています。

大山観光開発 KKによる、立山山麓トレッキングやマラソン大会等も企画され、観光ガイドの「うれの会」による立山山麓での案内も定着し充実しています。

近年では、ライチョウバレースキー場エリアでは「ジップライン」の設置でオフシーズンも「登山と宿泊」を結びつけたエージェントとの宿泊プランも全国に向けて浸透しつつあります。

政府の観光人口の増加への施策等もあり、立山アルペンルートへの外国人観光客の増加が多く、立山駅では外国に來ていると錯覚するほど他国の言語が聞こえ言葉の重要性を痛感いたします。

これからも、当地での温泉施設の増加を見込みたいところですが、少子化と人口減少や各宿泊施設の跡継ぎの問題、観光地としての課題が多く山積していて厳しい環境となっております。

先行きは楽観できませんが、健康志向の高まりで、日帰り客・宿泊者が増えているところであり、宿泊地として余暇の時間を過ごせる所を提案出来ることが課題であり、立山アルペンルートとの連携が不可欠と思われます。

世界に向けた立山黒部のブランド化への取り組みも始まっているところであり、当社としては今後の安定した経営を持続させるためにも、地域の環境変化に柔軟に対応出来るように努め、着実に維持しながら各施設への温泉供給の安定に取り組んで参りたいと思っています。

*

*

*

おわりに

創業前から現在までの軌跡を紹介しましたが、詳しい内容として資料に年表を載せました。近年になるほど細かな行事は少なくなっています。それだけ創業前後は大変な労苦が積み重なっていたと分かって頂けるのではないのでしょうか。

当社20年の時を経て、誰一人が欠けても成し得なかった事業だったと改めて思っております。

ここに、携わって頂いた全ての皆さんに深くお礼を申し上げます。